

日本語版への序文

本書の英文原書 *Arbitraging Japan: Dreams of Capitalism at the End of Finance* は二〇一三年にカリフォルニア大学出版局から出版された。一九九〇年代から二〇〇〇年代初頭、それまで科学や工学的知識の実践を研究してきた科学技術社会論が経済理論や金融工学にその分析の矛先を向けたのを契機として、文化人類学においても、金融市場や金融技術、そしてそれらに関与する人々について研究が始まり、金融人類学という分野が生まれた。二〇〇七年から二〇〇九年にかけて世界的に深刻な影響を与えた金融危機の後、金融人類学は更なる展開を見せ、現在では文化人類学の中で確立した一分野を形成している。当初、金融人類学は、金融という文化人類学にとって新しい研究対象に文化人類学の既存の理論や分析枠組みを当てはめるといふよりも、金融市場という新しいフィールドを通じて、文化人類学の理論と方法に新しい地平を切り開くための実験場であった。現在では、金融は文化人類学研究の重要な研究テーマの一つとなっており、さまざまな地域で貨幣と金融に関するさまざまな事象

についてフィールドワークに基づいた堅実な実証的な研究が蓄積されつつある。本書は金融人類学の実験的な試みの一つであると同時に、グローバル金融市場の中心地の一つとしての東京においてグローバルな金融の論理が辿った軌跡の一例を記録し分析したものである。

金融への文化人類学的関心が広まったのは、一九九〇年代末に起きたアジア通貨危機、そして二〇〇七年から二〇〇九年にかけて起きた世界的金融危機を通じて、金融市場がもたらす不均衡な富の集中と、金融市場の不安定性によってもたらされる経済への大きな影響が顕在化し、金融への批判的な関心が高まったからである。文化人類学者たちは、フィールドワークにもとづいて、多様な角度から金融市場とそれを取り巻く技術と知識の実践を検証してきた。こうした研究の根底には、貨幣の流れを大きく変え、その不安定性を国や地域を超えて一気に地球規模に連鎖させる金融市場を憂慮し、そうした金融の論理に抗するために社会的なもの、人間的なものを回復することが必要であるという問題意識がある。本書はこのような問題意識を、文化人類学において社会性や人間性に関する理論化のベースの一つである贈与論との関連で展開し、金融の論理とその実践の真つ只中に社会的なもの、人間的なものを見出すものである。

本書は、著者が、一九九八年から二〇一一年まで、主として東京において継続的に行った長期的なフィールド調査がもとになっている。言い換えれば、本書は、アジア通貨危機、リーマンショック、そして二〇一一年三月一日の東日本大震災、とりわけ福島第一原子力発電所事故の賠償問題による東京電力の危機という一連の金融危機を背景に、金融市場の荒波の中に身を置いた金融プロフェッショナルたちの思考と実践の軌跡を描いたものである。一九九〇年代末に著者が東京で知り合った四〇

人ほどの金融プロフェッショナルたちは、いずれも一九九〇年代初頭に金融界に入った人たちであるが、こうした状況の変化の中で、彼らの多くは、金融技術が輝かしく見えた一つの時代の「終わり」の感覚を共有するようになった。そこにはさまざまな「終わり」の感覚が交錯していたように見えた。世界的金融危機によって顕在化した金融市場の不正性とその論理への不信ばかりでなく、高度成長期の日本企業に見られた欧米の技術や知識に「追いつき・追い越せ」といった志向性の限界、そしてその「終わり」。そして、東日本大震災がもたらしたさらに存在論的な「終わり」の予見。そして年を重ねたそれぞれが直面する個人的なキャリアアの「終わり」。本書は、こうして錯綜する「終わり」の感覚を、何人かのトレーダーたちの人生、そして彼らとの対話を通して描き上げようとするものである。

こうした「終わり」についての本書の記述と分析の中心にあるのは、金融の論理に織り込まれている「終わり」への研ぎ澄まされ、かつ両義的な感覚である。本書ではこの感覚を「アービトラージ」という、一般には馴染みの薄い金融の論理と技法に関連づけている。アービトラージは、異なる市場で異なる価格で取引されている一つの商品や資産について、その価格の差異を収益源とする取引手法で、一般的には裁定取引と訳される。しかし、アービトラージは、取引手法という枠組みを超えて、金融市場、金融理論、金融工学の存立の根底にある基本的な概念であり、また、本書で論ずるように、金融プロフェッショナルたちの思考方法の基盤としても機能している。さらに言えば、こうした広い意味でのアービトラージの概念には、投機（スペキュレーション）とは異なるリスク観（時としてリスクのない取引と表現される）とともに、「終わり」の感覚（一つの商品や資産が異なる市場で異なる

る価格で取引されているのはさまざまな非効率性によるものであり、最終的にはそうした非効率性は淘汰され一つの価格へと収斂するという前提にもとづく感覚が強く結びついている。一方で、そうした感覚や前提への懐疑も同居しており（リスクがない取引などあり得ないということなど）、これが独特の曖昧さを生じさせている。本書ではこの曖昧さをそのまま表現し、さらには体現するためにあえて「アービトラージ」という言葉を日本語に翻訳せずにそのまま用いている。そのため文中にアービトラージという言葉が頻繁に登場し、議論の繰り返しと分かりづらさを増幅させているかもしれない。しかし、そうした繰り返しと分かりづらさこそ市場や世界との関わりの手法、思考の方法としてのアービトラージにまわりづくものであり、そのあたりを辛抱強く味わっていただければ幸いである。

日本語版準備にあたって、翻訳を担当した木村周平さん、高野さやかさん、早川真悠さん、深田淳太郎さんには大変ご尽力いただいた。また最終版の完成も遅れご迷惑とご心配をおかけした。最終段階では広島大学大学院の大畠奈都子さんのタイムリーで正確なお手伝いに助けられた。また、水声社の村山修亮さんの辛抱強い激励にも感謝したい。

本書に関わる初期の本格的なフィールドワークは、国際交流基金日米センターの資金提供による国際交流基金日米センターと、米国社会科学研究評議会の共催事業である安部フェローシップによって助成された。また、プロジェクト初期においてはアメリカ法律家財団による支援を受け、プロジェクト最終段階における調査は、コーネル大学が提供した研究資金によって遂行された。

本書の英語版執筆にあたっては多くの研究仲間からの助言に助けられたが、そのリストを載せると

なると長くなるので、まとめて深い感謝を捧げるにとどめたい。ただ、金融人類学の同僚であるビル・マウラー、ダグラス・ホームズ、とりわけアナリサ・ライルズから受けた知的刺激と建設的な批判がなければ本書は完成に至らなかつたであろうことだけは記しておきたい。

また、一九九八年からの東京でのフィールドワークに関わってくれたすべてのの方々に感謝する。とりわけ、本書において青木、井深、石田、小山、佐々木、多田、田中と呼ぶトレーダーたちが示してくれた寛容さと友情はこの波瀾万丈の一〇数年間を生き抜く糧となった。また、東京証券取引所や大阪証券取引所の職員の方々、調査に参加してくれたその他のの方々にも、私の研究に割いてくれた時間に感謝する。言うまでもないが、本書で示される見解や主張、そして見つかるかもしれない誤りの責任は、全て著者である私にある。日本語版準備にあたって改めて全体に目を通し明らかでない誤りはできる限り修正したことを記しておく。また、対話者の言葉からの引用部分など日本語版のために選び直したところもある。

また以上に加えて、日本の大手証券会社を退職した証券アナリストであり、金融マーケットに科学的な観点からアプローチしようとした日本における初期の取り組みの成果『株式市場の科学』〔山下一九八七〕の著者でもある、遠縁の山下竹二にも感謝の意を表したい。彼はこのプロジェクトを開始する際に、私を何人もの証券業界の関係者に紹介してくれた。

私の母、宮崎敬子はこのプロジェクトの胎動期から強い関心を示してくれた。私を、のちにフィールド調査を行うことになる証券会社の幹部に紹介してくれたのは母の友人のひとりだった。この紹介なくしては、このプロジェクトは始動しえなかつた。

なお、本書においては特段の断りがない限り、人名や企業名はすべて架空のものである。またプライバシーの保護のため、個人のある側面を修正したり、語りの独特の言い回しなどを変更した部分もある。

本書では、著作権所有者の許可のもと、以下の既発表の論文の一部ないし全体が、部分修正のうえで、あるいはそのまま、複製されていることを記しておく。

“The Materiality of Finance Theory.” *Materiality*, ed. Daniel Miller, 165-181. Durham: Duke University Press, 2005.

“Economy of Dreams: Hope in Global Capitalism and Its Critiques.” *Cultural Anthropology* 21, no. 2 (2006): 147-172.

“Arbitraging Faith and Reason” (commentary on Jane Guyer, “Prophecy and the Near Future: Thoughts on Macroeconomic, Evangelical and Punctuated Time”), *American Ethnologist* 34, no. 3 (2007): 430-432.

“Between Arbitrage and Speculation: An Economy of Belief and Doubt.” *Economy and Society* 36, no. 3 (2007): 397-416.

「金融人類学から見た金融の『終わり』(前編)——トレーダーたちの二〇年と日本的『学習』の限界」『中央公論』二〇一二年二月号、一六四—一七五頁。

「金融人類学から見た金融の『終わり』(後編)——不確定で不可知な世界を引き受ける技法」『中央公論』二〇一二年三月号、一六二—一七三頁。